



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北東アジアにおける国際協力を通じた地方振興に関する考察 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	新井, 洋史
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第16479号
Issue Date	2025-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94853
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hirofumi_Arai_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名： 新 井 洋 史

主査 教 授 服部 倫卓
審査委員 副査 教 授 岩下 明裕
副査 教 授 橋本 雄一
副査 名誉教授 田畑 伸一郎（北海道大学）

学位論文題名

北東アジアにおける国際協力を通じた地方振興に関する考察

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、冷戦終焉後の北東アジアで、国家間の経済交流は拡大したものの、当初大きな期待を集めた「環日本海経済圏」の形成、すなわち日本、韓国、ロシア等の日本海沿岸地域間の交流拡大はなぜ上手く行かなかったかという問題に取り組んでいる。

この問いに対し、本論文における分析を通じて、以下のような解釈が導き出された。各国の条件有利地域において、経済合理性に基づく形でヒト・モノの自由な移動が先行して実現し、これらの地方での取引拡大が加速した。それに対し、採算性が低く企業努力だけでは環境の改善が見込めない環日本海地域においては、政策的対応が不可欠であったにも関わらず、十分な政策資源が投入されず、成果は限定的だった。一方で市場原理を前提としつつ、他方で政府による支援を必要としていたところに、輸送回廊構想の限界があった、との解釈である。

学位申請者は、新潟県を拠点とする公益財団法人環日本海経済研究所に長年身を置き、環日本海経済圏というテーマに研究者・実務家として一貫してかかわってきた。現実には、環日本海経済圏は成功を収めるに至らず、ここ数年は話題に上ることも少なくなり、同研究所も令和4年度をもって解散となった。本論文の最大の意義は、このテーマを論ずるのに最もふさわしい学位申請者が、これまでの自らの研究を集大成しつつ、環日本海経済圏というテーマを総括してみせた点にあると考えられる。

・学位授与に関する委員会の所見

上記の問いに対して、本研究は主に政策策定・実施プロセスの面からの検証を行っており、具体的には北東アジアにおける地方振興に着目し、域内での国際協力、特に運輸部門での国際協力にフォーカスしている。

このための準備作業、たとえばロシア極東には運輸・ロジスティクス環境の改善を必要とする企業が多く立地していることを証明し（第3章）、ロシア政府がどのような政策体系の下でロシア極東の開発、輸送インフラの整備を進めているのかを政策文書で確認するなど（第4章）、基礎的な準備作業を的確に行っていることは評価に値する。

本論文は基本的には異なった時期に書かれた既存の論考をまとめ上げたものだが、破綻なく一つの論文に落とし込んでおり、全体の構成が巧みである。第2章、第3章が準備作業、第4章でロ

シアの政策、第5章で中国の政策、第6章でロ中協力、第7章でロ朝協力、第8章で集大成としての大図們江イニシアチブ (GTI) を取り上げている。第Ⅲ部に当たる第5～8章は、国際経済関係、経済地理の事例研究として、北東アジア以外の地域に関心を持つ者にもアピールしうる。

なかでも第6章の完成度は特筆され、「2009-2018年プログラム」と「2018-2024年計画」の分析は非常に興味深く、この面での中ロの違いを抽出したことは高く評価できる。中ロの政策を国家や地方などマルチスケールで詳細に検討し、法的制度などソフトインフラに関しても検討している点で評価が高い。第8章で、環日本海協力のすべてが失敗に終わってしまったのではなく、GTIという形で残っているものがあることを示したことも意義深い。さらに、「借港出海」コンセプトを含む中国の取り組み（第5章）、北朝鮮労働者を含むロ朝間協力（第7章）など、有益な情報が多く得られることも論文の価値を高めている。

その一方で、委員からは、技術的な方法論についての疑問点も示された。第2章のエネルギー資源貿易の経済効果に関するシミュレーションは適切だったのか、同じく第2章の「日本海貿易特化係数」が意味するところは何か、第3章で順序プロビットモデルを用いたのはなぜかといった問題が提起された。北東アジアのハブ港に成長している釜山港をもっと視野に入れるべきだったのではないか、日本の対ロ中古車輸出や航空路に論及していないのはなぜかといった疑問点も生じた。さらに、学位申請者の主たる研究対象はロシア極東であり、本論文においてもそれに多くの紙幅が割かれている以上は、論文のタイトルにもロシアを入れるべきだったのではないかとの指摘も寄せられた。

それでも、口頭試問において学位申請者よりそれぞれの疑問に関する誠意ある回答が示され、本論文で採られた一連の方法論にはそれぞれ必然性があり、課題を残している場合でも学位申請者が十分に自覚し今後の研究に活かそうとしていることが確認された。壮大であるがゆえに、つい「あれもこれも」と望みたくなる研究テーマではあるが、本論文では運輸部門での国際協力を中心に北東アジアの地方振興を政策策定・実施プロセスの面から検証するという具体的なアプローチが奏功しており、環日本海経済圏が期待を集めた一時代の総括に高い水準で成功している。

本審査委員会は、以上のような審査結果により、全員一致して本申請論文が博士（学術）の学位を授与されるにふさわしいものであると認定した。